

博士論文（要約）

論文題目 シベ語のアスペクト・モダリティの研究
—知識状態の変化にもとづく体系化—

氏 名 児倉 徳和

目次

要旨.....	i
序文.....	v
目次.....	vi
図表目次.....	xi
略号一覧.....	iv
第1章 序説.....	1
1.1. 地理的情報.....	1
1.2. 言語学的情報.....	1
1.3. 先行研究.....	2
1.4. 音韻論.....	2
1.4.1. 音素目録.....	2
1.4.1.1. 子音.....	2
1.4.1.2. 母音.....	3
1.4.2. 音節、モーラ.....	3
1.4.3. 語アクセント.....	4
1.4.4. イントネーション.....	4
1.5. 形態論.....	6
1.5.1. 名詞形態論.....	6
1.5.1.1. 数.....	6
1.5.1.2. 格.....	7
1.5.1.3. 主題.....	7
1.5.1.4. 代名詞.....	7
1.5.2. 動詞形態論.....	8
1.5.2.1. ヴォイス.....	8
1.5.2.2. アスペクト接辞.....	9
1.5.2.3. モダリティ語尾.....	9
1.5.2.4. 意志・命令・願望.....	10
1.5.2.5. 副動詞接辞.....	10
1.5.3. 名詞と動詞の区別.....	11
1.5.4. 名詞と形容詞.....	12
1.5.5. 文末詞.....	12
1.5.6. 否定詞.....	12
1.6. 文と節の構造.....	13
1.6.1. 文の種類と構造.....	13
1.6.1.1. 平叙文.....	13
1.6.1.2. 命令文.....	14
1.6.1.3. 疑問文.....	15
1.6.2. 節の種類と構造.....	15
1.6.2.1. 引用節.....	15
1.6.2.2. 名詞節.....	16
1.6.2.3. 副詞節.....	16
1.6.2.4. 連体節.....	16
1.6.3. 補助動詞.....	16

1.7. まとめ	18
第2章 先行研究と議論の枠組み	19
2.1. シベ語の先行研究：李樹蘭ほか（1984、1986）の記述	19
2.1.1. -Xe _i , -Xe _e , -Xe	20
2.1.2. -ma _{xe} , -ma _{xei} , -ma _{xe} e	20
2.1.3. -ma _{xe} , -Xe	21
2.1.4. -mi	21
2.1.5. biXe, biXe _i	22
2.1.6. oXe _i	23
2.2. 先行研究による記述の検討	23
2.2.1. -Xe _i , -Xe _e , -Xe	23
2.2.2. -mi, -ma _{xei} , -Xe _i	26
2.2.3. 補助動詞 bi-	27
2.2.4. 補助動詞 o-	28
2.2.5. その他：補助動詞 yela-	28
2.2.6. まとめ	28
2.2.6.1. 本論文で扱う形式	28
2.2.6.2. 本論文で扱う問題	29
2.3. 記述のための枠組み：特にモダリティの記述に向けて	29
2.3.1. 文形式と知識の処理の心的プロセスの対応	29
2.3.1.1. 証拠性 (Evidentiality) の定義をめぐって	29
2.3.1.2. 知識データベースモデル (齊藤 2006)	30
2.3.2. 対話における使用も含めた文形式の機能の記述に向けて	35
2.3.2.1. 「共有知識のパラドクス」の問題	35
2.3.2.2. 発話と記憶領域の状態変化の関係をどのように考えるか	36
2.3.2.3. 「協調の原理」の位置づけ	37
2.4. 本論文で採用する仮定・枠組み	38
2.4.1. 知識	38
2.4.1.1. 知識を構成する要素の種類	38
2.4.1.2. 知識の構成要素の reliability	39
2.4.1.3. 記憶領域と知識データベース	39
2.4.2. 知識状態の変化	40
2.4.2.1. 命題の書き込み	40
2.4.2.2. 命題の削除	42
2.4.2.3. 命題の読み出し	44
2.4.3. 対話における知識状態の変化	45
2.4.3.1. 発話参加者の知識状態の変化と発話による操作	45
2.4.3.2. 「話し手」と「聞き手」	47
2.4.3.3. 「対話」と「独り言」	47
2.4.3.4. 発話と知識状態の状態変化にかかわる語用論的原理	47
2.5. 本論文で使用するデータ	49
2.6. 例文の許容度の表記について	49
2.7. まとめ	49
第3章 アスペクト接辞 -re, -Xe, -ma_{xe}	50
3.1. 問題となる形式と本章での主張	50
3.2. -mi の意味：-ma _{xei} との比較	50
3.2.1. 「未来」	50
3.2.2. 「習慣」「法則」	51

3.2.3. 「属性」	52
3.3. -mi の意味：-Xeï との比較	55
3.3.1. 「未来」	55
3.3.2. 「習慣」「法則」	55
3.3.3. 「属性」	56
3.4. -Xeï と -maɣei の比較.....	59
3.4.1. 「終結点を含めて把握された出来事」か「終結点を含めずに把握された出来事」か.....	59
3.4.2. -Xeï が表す出来事の「終結点」の特徴.....	61
3.5. 否定形 =qu、-Xaqui、-maɣaqui.....	62
3.6. まとめ.....	63
3.7. -mi、-maɣei、-Xeï の対立を持たない動詞.....	64
3.8. -mi、-maɣei、-Xeï の対立はテンスか？	64
第4章 動詞完了形の三形式とモダリティ語尾 =i、=ɣe	67
4.1. 問題となる形式と本章での主張.....	67
4.1.1. -Xeï	67
4.1.2. -Xeɣe.....	67
4.1.3. -Xe	68
4.2. 三形式の機能の差異.....	68
4.2.1. -Xeï と -Xe の比較	68
4.2.1.1. 平叙文における差異	68
4.2.1.2. 疑問文における差異	72
4.2.2. -Xeɣe と -Xe の比較.....	75
4.2.2.1. 平叙文における差異	75
4.2.2.2. 疑問文における差異	76
4.2.3. -Xeï と -Xeɣe の比較.....	77
4.2.3.1. 平叙文における差異	77
4.2.3.2. 疑問文における差異	82
4.2.4. -Xeï、-Xeɣe、-Xe の差異のまとめ.....	84
4.3. 三形式の機能の統一的理解に向けて：「発話参加者の知識状態の変化」から	86
4.3.1. 文の機能と文が表す発話参加者の知識状態の変化.....	86
4.3.2. -Xeï は発話参加者の知識状態のどのような変化を表すか.....	87
4.3.2.1. 平叙文の場合	87
4.3.2.2. 疑問文の場合	96
4.3.3. -Xeɣe は発話参加者の知識状態のどのような変化を表すか.....	101
4.3.3.1. 平叙文の場合	101
4.3.3.2. 疑問文の場合	108
4.3.4. -Xe は発話参加者の知識状態のどのような変化を表すか.....	113
4.4. 否定形 -Xaqui、-Xaɣeɣe、-Xaqu	113
4.5. まとめ.....	115
第5章 動詞非完了形・非現実形における三形式.....	117
5.1. 問題となる形式と本章での主張.....	117
5.2. 非完了形の三形式 -maɣei、-maɣeɣe、-maɣe.....	117
5.2.1. -maɣei.....	117
5.2.2. -maɣeɣe.....	118
5.2.3. -maɣe.....	118
5.2.4. 三形式の機能の差異.....	118

5.2.4.1. 平叙文における差異	118
5.2.4.2. 疑問文における差異	119
5.3. 非現実形の三形式 -mi、-reŋe、-re	120
5.3.1. -mi	120
5.3.2. -re	121
5.3.3. -reŋe	121
5.3.4. 三形式の機能の差異	121
5.4. 否定形 -maŋaqui、-maŋaquŋe、=qui、=qu	122
5.5. 名詞・形容詞における三形式の対立	123
5.6. まとめ	125
第6章 知識状態の変化とイントネーション	127
6.1. 本章での主張	127
6.2. シベ語のイントネーションについて	127
6.3. イントネーションと知識状態の変化	127
6.3.1. 平叙文	127
6.3.2. 疑問文	129
6.3.2.1. 疑問詞疑問文	129
6.3.2.2. 真偽疑問文	130
6.4. まとめ	131
第7章 ゼロ形と ŋe 形の非述語用法	133
7.1. 本章での主張	133
7.2. 連体用法	133
7.2.1. シベ語の動詞述語文における節の構造	133
7.2.2. 節の種類と節中に出現可能な要素の階層性	134
7.3. 名詞用法	136
7.4. まとめ	139
第8章 補助動詞 bi-、o-、yela-の機能	140
8.1. 補助動詞について	140
8.2. bi-	142
8.2.1. 問題となる形式と本節での主張	142
8.2.2. 補助動詞 bi-の機能	142
8.2.2.1. biXe	142
8.2.2.2. bi-Xe=ŋe	155
8.2.2.3. bi-Xe	162
8.2.3. 補助動詞 bi- の意味と bi の表す「存在」	167
8.2.4. bi- のまとめ	167
8.3. o-	169
8.3.1. 問題となる形式と本節での主張	169
8.3.2. 補助動詞 o-の機能	169
8.3.2.1. 完了 i 形 (o-Xei)	169
8.3.2.2. 完了ゼロ形 (oXe)	189
8.3.2.3. 非現実 i 形 (omi)	195
8.3.2.4. 非現実ゼロ形 (ore)	196
8.3.3. 補助動詞 o- の表す知識状態の変化と「変化」	197
8.3.4. o-のまとめ	197
8.4. yela-	199
8.4.1. 問題となる形式と本節での主張	199
8.4.2. 補助動詞 yela-の機能	199

8.4.2.1. 完了 i 形 (yelaXe <i>i</i>)	199
8.4.2.2. 完了 <i>ŋe</i> 形 (yelaXe <i>ŋe</i>)	212
8.4.3. 補助動詞 yela- の意味と yela-の表す「停止」	220
8.4.4. yela-のまとめ.....	221
8.5. 補助動詞のまとめ	221
第 9 章 本研究の研究史的 position 付けと残された問題.....	224
9.1. 先行研究への position 付け	224
9.1.1. シベ語の先行研究への position 付け.....	224
9.1.2. モダリティ研究一般への position 付け.....	224
9.2. 残された問題.....	226
第 10 章 結論.....	229
用語索引.....	234
参考文献.....	235

図表目次

図 1-1	新疆ウイグル自治区と東北地方.....	1
図 1-2	イーニン市とチャブチャルシボ自治県.....	1
図 1-3	下降イントネーション（左）と中平イントネーション（右）のピッチ曲線.....	5
図 1-4	上昇イントネーション（上）と下降イントネーション（下）のピッチ曲線.....	6
図 1-5	名詞語幹のとりうる要素.....	6
図 1-6	動詞の形態的構造.....	8
図 1-7	本動詞＋補助動詞の構造.....	17
図 2-1	Chafe (1986) による Evidentiality にかかわる知識のモデル.....	30
図 2-2	齊藤 (2006) による文の統語処理と記憶領域への入力モデル.....	32
図 3-1	本章で主張する動詞アスペクト接辞の体系.....	50
図 4-1	本章で主張する完了形三形式の体系.....	67
図 7-1	動詞述語文（平叙文・疑問文）の述部の構造.....	133
図 7-2	副詞節の述部の構造.....	134
図 10-1	動詞述語文と動詞＋補助動詞の構造.....	229
図 10-2	名詞・形容詞述語文と、名詞・形容詞＋補助動詞の構造.....	229
表 1-1	子音音素の目録.....	2
表 1-2	名詞の格形式.....	7
表 1-3	人称代名詞のパラダイム.....	7
表 1-4	アスペクト接辞のパラダイム（肯定／否定）.....	9
表 1-5	アスペクト接辞＋モダリティ語尾のパラダイム（肯定／否定）.....	10
表 1-6	意志・命令・願望を表す形式.....	10
表 1-7	名詞と動詞の特徴.....	11
表 1-8	補助動詞の分類.....	18
表 2-1	李ほか (1984) によるシベ語のテンス・アスペクトの体系.....	19
表 2-2	李ほか (1986) によるシベ語のテンス・アスペクトの体系.....	19
表 2-3	李ほか (1986) によるシベ語のテンス・アスペクトの体系（本論文の表記）.....	19
表 2-4	本動詞のとりうる形式（肯定／否定）（表 1-5 再掲）.....	28
表 2-5	補助動詞 bi-のとりうる形式と組み合わせられる要素.....	29
表 2-6	補助動詞 o-のとりうる形式と組み合わせられる要素.....	29
表 2-7	補助動詞 yela-のとりうる形式と組み合わせられる要素.....	29
表 3-1	李樹蘭ほか (1986) によるシベ語のテンス・アスペクトの体系（表 2-2 再掲）.....	65
表 4-1	話し手の予測する発話参加者の知識状態と-Xei 疑問文の機能.....	100
表 4-2	話し手が予測する発話参加者の知識状態と-Xeje 疑問文の機能.....	113
表 5-1	アスペクト接辞＋モダリティ語尾のパラダイム（肯定／否定）（表 1-5 再掲）.....	117
表 7-1	節の種類と節中に出現可能な要素.....	134
表 8-1	補助動詞 bi-, o-, yela-の三形式.....	140
表 8-2	補助動詞 bi-のとりうる形式と組み合わせられる要素（表 2-5 再掲）.....	142
表 8-3	テキストのジャンルと各述語形式の頻度.....	150
表 8-4	主節の述部における biXeи の使用と人称代名詞の指示対象.....	152
表 8-5	補助動詞 o-のパラダイムと組み合わせられる要素（表 2-6 再掲）.....	169
表 8-6	補助動詞 o-の諸形式の機能のまとめ.....	198
表 8-7	補助動詞 yela-のパラダイムと組み合わせられる要素（表 2-7 再掲）.....	199
表 9-1	アスペクト接辞＋モダリティ語尾のパラダイム（肯定／否定）（表 1-5 再掲）.....	

.....	226
表 10-1 アスペクト接辞の体系（肯定／否定）	230
表 10-2 モダリティ語尾が表す知識状態の変化.....	230
表 10-3 補助動詞 bi- の三形式が表す知識状態の変化	230
表 10-4 補助動詞 o-、yela- の三形式が表す知識状態の変化.....	231

本論文は全部分について改訂ののち、以下の著作物として公刊されています。

児倉徳和『シベ語のモダリティの研究』東京：勉誠出版，2018年3月
ISBN: 978-4-585-28039-2

出版社との契約により、本文を他の媒体で公表することができないため、本文の公表は差し控えさせていただきます。

2018年6月
著者

参考文献

(アルファベット順)

- Aikhenvald, Alexandra (2003) Evidentiality in typological perspective, In Aikhenvald, Alexandra, Dixon, R.M.W. (Eds.), *Studies in Evidentiality*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. pp.1-31.
- Aikhenvald, Alexandra (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.
- 愛新覚羅烏拉熙春 (1992) 『満洲語語音研究』 京都：玄文社。
- Aksu-Koç, Ayhan, A, Slobin, Dan. I (1986) A psychological account of the development and use of evidentials in Turkish. In. Chafe, Wallace, Nichols, Johanna. (eds.) 159-167.
- Austin, J. L. (1975) *How to do things with words*. (2nd ed.), Oxford, New York: Oxford University Press.
- Chafe, Wallace (1973) *Language and memory*. *Language*. 49: 261-281.
- (1986) Evidentiality in English conversation and academic writing. In. Chafe, Wallace, Nichols, Johanna. (eds.) 261-272.
- (1994) *Discourse, Consciousness and Time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Chafe, Wallace, Nichols, Johanna (eds.) (1986) *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Norwood, New Jersey : Ablex Publishing. Corporation.
- 朝克 (2006) 『現代錫伯語口語研究』 北京：民族出版社。
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, Scott (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33(3): 369-382.
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: An introduction, Vol.2*. Amsterdam: John Benjamins.
- Grice, H. Paul (1975) *Logic and conversation*. (In) Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics. Vol.3: Speech Acts*, 43-58. New York: Academic Press.
- (1989) *Studies in the way of words*. Cambridge: Harvard University Press.
- 服部四郎・山本謙吾 (1956) 「満洲語口語の音韻の体系と構造」 『言語研究』 30: 1-29.
- 早田輝洋 (1985) 「シボ語について」 『言語』 14 (7): 94-99.
- Ikegami, Jiro (1974) *Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, Sprache, Geschichte und Kultur der altaiischen Völker*, 271-272. Berlin: Akademie-Verlag.
- 池上二良 (1979) 「満洲語とツングース語：その構造上の相違点と蒙古語の影響」 『東方学』 58: 143-153.
- 風間伸次郎 (2009) 「オロチ語とウデヘ語の異同について」 『語学研究所論集』 14: 1-13.
- 木村英樹・森山卓郎 (1992) 「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して—」 『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』 3-43. 東京：くろしお出版。
- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011a) 『2011年度言語研修テキスト1 シベ語の基礎』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 久保智之・児倉徳和・庄声 (2011b) 『2011年度言語研修テキスト2 シベ語語彙集』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 久保智之 (1993) 「シベ語 (満洲語口語) 音韻論のための覚え書き—語末に [ɔ] が出現するいくつかの場合—」 『言語文化接触に関する研究—シンポジウム「満洲語の言語学的・文献学的研究」—』 5: 25-43. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- (2009) 「シベ語」 梶茂樹・中島由美・林徹 (編) 『事典 世界のことば 141』 20-23. 東京：大修館書店。
- Kubo, Tomoyuki (2008) A sketch of Sibe phonology. 寺村政男・久保智之・福盛貴弘編 『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』 (『語学研究フォーラム』 16) :127-142. 大東文化大学。
- (2011) Sibe Intonation. In: *Proceedings of the 10th Seoul International Altaistic Conference - Reexaminations of objects and methods of research into the Altaic languages and cultures*. 89-98. Suncheon National University.

- Langacker, Ronald, W. (2008) *Cognitive grammar: a basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lazard, Gilbert (1999) Mirativity, evidentiality, mediativity, or other? *Linguistic Typology*:3:91-109.
- 李樹蘭 (1984) 「錫伯語動詞陳述式的親知口氣和親知口氣」『民族語文』第6期, 26-32.
- (1988) 「論錫伯語的助動詞」『民族語文』第6期, 27-32.
- (1997) 「錫伯語内部差異和促發語言演變的因素」『民族語文』第1期, 69-75.
- 李樹蘭・仲謙・王慶豐 (1984) 『錫伯語口語研究』北京: 民族出版社.
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『錫伯語簡誌』北京: 民族出版社.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.
- Mushin, Ilana (2000) Evidentiality and deixis in narrative retelling. *Journal of Pragmatics*,32: 927-957.
- (2001) *Evidentiality and epistemological stance: narrative retelling*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1:63-88.
- (1997) 「「独り言」をめぐって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明, 仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』173-188.東京: ひつじ書房.
- Norman, Jerry (1974) A sketch of Sibe morphology. *Central Asiatic Journal* 18: 159-174.
- Palmer, F. R (2001) *Mood and Modality* (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.
- 定延利之, 田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええ」と「あの(一)」—」『言語研究』108: 74-93.
- 齊藤学 (2006) 「自然言語の証拠推量表現と知識管理」博士論文, 九州大学.
- 薩蒙, 伊爾罕芝, 郭向陽, 謝巍 (2011) 『錫伯語通論』烏魯木齊: 新疆人民出版社.
- Searle, John. R. (1976) The classification of illocutionary acts. *Language in Society* 5: 1-23.
- Slobin, Dan. I.; & Aksu, Ayhan. A. (1982). Tense, aspect and modality in the use of the Turkish evidential. In P. J. Hopper (Ed.), *Tense-aspect: Between semantics & pragmatics*. 185-199. Amsterdam: Benjamins.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3): 59-74.
- 上山あゆみ (2005) 「経験科学としての生成文法—文法性と容認可能性—」『九州大学言語学論集』25
- 山本謙吾 (1969) 『満洲語口語基礎語彙集』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 尹嘉珉, 喬俊軍 (編) (2008) 『新疆維吾爾自治区地図冊』北京: 中国地図出版社.
- 張泰鎬 (2008) 『錫伯語語法研究』昆明: 雲南民族出版社.

<インターネットサイト>

中国まるごと百科事典 <http://www.allchinainfo.com/map/> (最終確認日: 2013年9月3日)

要旨

本論文は、シベ語（満洲＝ツングース諸語）において従来テンス・アスペクト・モダリティとして記述されてきた要素について、発話参加者の記憶領域の状態（以下知識状態と呼ぶ）の変化という観点を導入して、新たに体系化を目指すものである。

本論文の特徴は、体系化に際し、できるかぎり個々の形態素（接辞、語尾、補助動詞）に固有の意味や機能を割当て、文全体が表す複雑なアスペクトとモダリティの意味を、それを構成する形態素（接辞、語尾、補助動詞）のそれぞれの意味や機能の組み合わせとして分析的に説明するという方針をとった点と、個々の形態素の意味や機能の説明に当たり、知識データベースとバッファという2つの記憶領域を発話参加者が持つと仮定することにより、異なる形態素が持つ意味や機能を、互いの関係を明確しつつ統一的に提示することを目指した点にあると考える。以下、本論文での論述に沿って、その前提と主張を要約する。

本論文ではまず、日本語の証拠推量表現「ようだ」と「らしい」について論じた齊藤(2006)に従い、言語主体の記憶領域に知識データベースとバッファという2つの領域を仮定し、本論文で扱う形式のうち、モダリティ語尾と補助動詞 **bi-**、**o-**、**yela-** は発話参加者の知識状態の変化を表すと仮定する。また、基本的な知識状態（知識データベースの内容）の変化として、(i) 直接経験や発話に基づく情報が命題の形式で知識データベースに書き込まれる、(ii) 知識データベース内の命題が削除される、(iii) 知識データベースに既存の命題が読み出されるという3つを仮定する。さらに、命題は知識データベースに書き込まれる際に、バッファにおいて知識データベースから読み出された関連する命題との間に矛盾がないかチェックを受け、矛盾が存在する場合には予め形式により定められた手段で矛盾が解消される、というプロセスを経ると仮定する。このような仮定を行うことにより、シベ語のアスペクト・モダリティの体系化を目指す。

本論文の主張は以下のようにまとめられる。

- [1] シベ語の動詞述語文の述部を構成する要素は平叙文の場合以下の図1のように整理される。本論文の主張するアスペクト・モダリティは、図中のアスペクト接辞、モダリティ語尾と補助動詞語幹の3つの要素によって表され、文全体の表すアスペクト・モダリティはそれぞれの形式が持つ意味を足し合わせることにより分析的に導くことが可能である。（名詞・形容詞述語文も補助動詞が後続した場合には動詞述語文に準じた分析が可能である。）

本動詞			本動詞		
語幹	アスペクト接辞		語幹	アスペクト接辞	モダリティ語尾
V-	-re / -Xe / -maye		—	—	=i / =ŋe / (なし)
本動詞			補助動詞		
語幹	アスペクト接辞 (・副動詞)		語幹	アスペクト接辞	モダリティ語尾
V-	-me / -Xe / -maye	+	bi-	-Xe	=i / =ŋe / (なし)
	-me	+	o-	-re / -Xe	=i / (なし)
	-me	+	yela-	-Xe	=i / =ŋe

図1 動詞述語文と動詞+補助動詞の構造

- [2] 述部の構成要素のうち、アスペクト接辞 **-re**、**-Xe**、**-maxe** をモダリティ語尾 **=i** が後続した形式 **-mi**、**-Xe*i***、**-maxe*i*** の場合で比較すると、まず、**-mi**が**-Xe*i***、**-maxe*i***の両者と異なることがわかる。なぜならば、**-Xe*i***と**-maxe*i***が実際に実現した具体的な出来事を表すのに対し、**-mi**は具体的な出来事として実現していない事態（事柄）を表すからである。一方、**-Xe*i***と**-maxe*i***の間には、**-Xe*i***は完了的（perfective）に把握された、実際に実現した具体的な出来事、つまり「終結点を含んだものとして把握された、実際に実現した具体的な出来事」を表すのに対し、**-maxe*i***は非完了的（imperfective）に把握された、実際に実現した具体的な出来事、つまり「終結点を含まないものとして把握された、実際に実現した具体的な出来事」を表す、という相違が認められる。このことから、アスペクト接辞**-re**、**-Xe**、**-maxe**の体系は以下の図2のようにまとめられる。

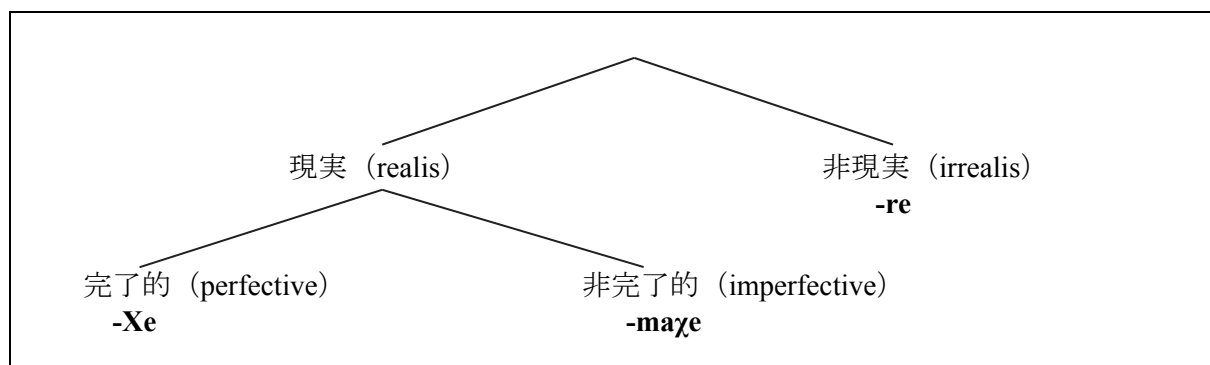


図2 動詞アスペクト接辞の体系

- [3] モダリティ語尾 **=i**、**=ɲe** は、アスペクト接辞に後続する場合と後続しない場合がある。まず、2つのモダリティ語尾が後続する場合を比較すると、**=i**が後続した形式は文の表す命題が発話参加者の知識データベースに書き込まれる、という発話参加者の知識データベースの状態変化を表し、**=ɲe**が後続した形式は文の表す命題が発話参加者の知識データベースから読み出されるという知識状態の変化を表すことがわかる。これに対し、モダリティ語尾が後続しない形式は、発話参加者の知識データベースの状態が変化しないことを表す。この体系は以下の図3のようにまとめられる。

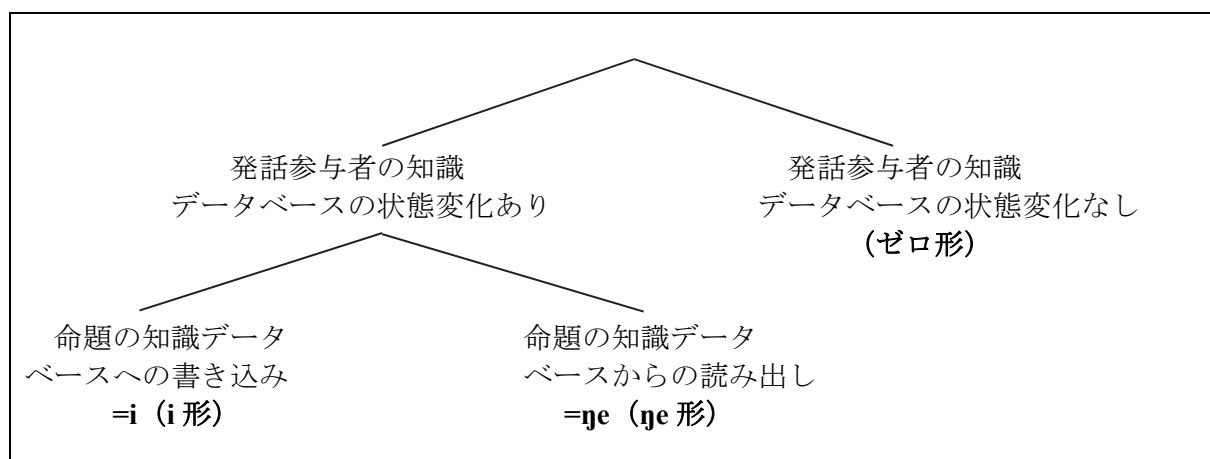


図3 モダリティ語尾 **=i**、**=ɲe** と語尾をとらない形式の表す知識状態の変化

- [4] 補助動詞 **bi-**、**o-**、**yela-** が後続する場合と後続しない場合の比較からは、補助動詞をとらない形式により表される知識状態の変化は、①話し手と聞き手両方の知識状態の変化である、②バッファ内に存在する命題が互いに矛盾する場合に、一方が棄却、削除されることにより矛盾が解消される、という2つの特徴を持つことがわかる。補助

動詞 **bi-**、**o-**、**yela-** はこの 2 つの特徴に関して、以下のように発話参加者の異なる知識状態の変化を表す。

まず補助動詞 **bi-** は、それを持たない形式が話し手と聞き手両方の知識状態の変化を表すのに対して、「話し手のみ」の知識状態の変化を表す。補助動詞 **bi-** をモダリティ語尾との関係で見ると、**bi-** にモダリティ語尾 **=i**、**=ŋe** がそれぞれ後続する形式、および、**bi-** に全く語尾が後続しない形式の、計三形式がある。**bi-** に **=i** が後続する場合は「話し手のみの知識データベースに文の表す命題が書き込まれる」、**bi-** に **=ŋe** が後続する場合は「話し手の知識データベースから文の表す命題が読み出され、話し手のみのバッファで処理が行われる」、**bi-** になにもモダリティ語尾が後続しない場合は「話し手のみの知識データベースの状態が変化しない」という知識状態の変化（この場合は不変化）を表す。

補助動詞 **o-** と **yela-** は、以下の図 4 にあるように、これらの補助動詞を取らない形式が、バッファ内に存在する命題が互いに矛盾する場合に、一方が棄却、削除されることにより矛盾が解消される、という知識状態の変化のプロセスを表すのに対し、補助動詞 **o-** と **yela-** は共通して「バッファ内に存在する命題が互いに矛盾する場合に、いずれの命題も棄却、削除されることなく、命題の内容が改変されることにより矛盾が解消される」という知識状態の変化のプロセスを表す。一方、**o-** と **yela-** は、**o-** が「矛盾する両方の命題が改変される」のに対し、**yela-** は「**yela-** を含む文の表す命題のみ改変される」という点で区別される。さらに、補助動詞 **o-**、**yela-** にも、**bi-** に比べ制限があるものの、モダリティ語尾 **=i**、**=ŋe** を取る形式とモダリティ語尾を取らない形式が存在し、補助動詞 **o-** の場合は「矛盾する両方の命題が改変される」、補助動詞 **yela-** の場合は「**yela-** を含む文の表す命題のみが改変される」という方法により矛盾が解消された上での、命題の知識データベースへの書き込みと知識データベースからの命題の読み出し、または知識データベースの状態の状態変化がないことを表す。

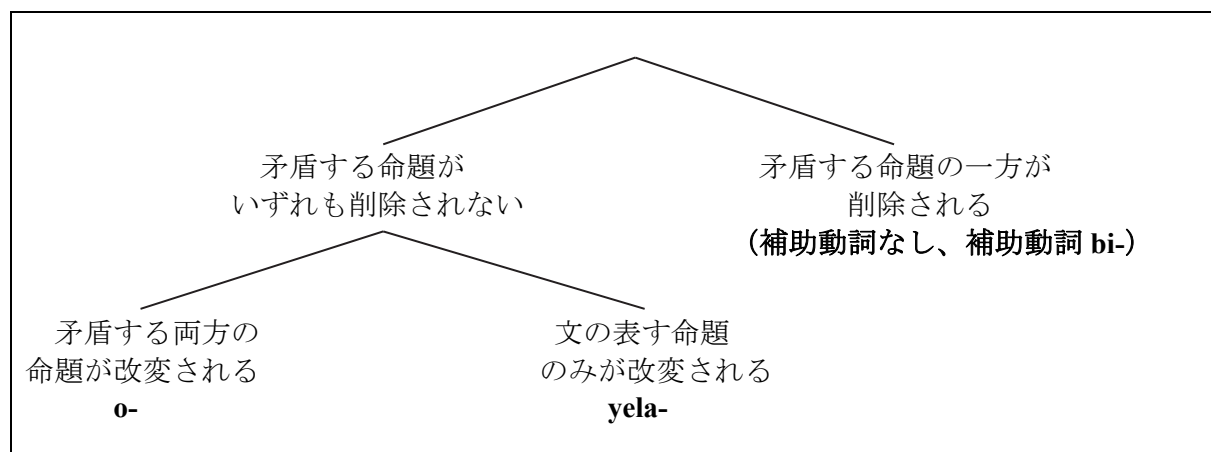


図 4 補助動詞 **o-**、**yela-** の表す知識状態の変化

- [5] 本論文の主張するアスペクト・モダリティ体系は、より整理された体系であるだけでなく、文に現れる分節的形式と文の取りうるイントネーションとの間の関係を捉えられるという点、および、モダリティ語尾 **=i** をとる形式、**=ŋe** をとる形式、モダリティ語尾をとらない形式の三形式の間に見られる形態統語論的な特徴の差異に妥当な説明を与えられるという点で、従来の分析より優れているといえる。

本論文の全体の構成は以下の通りである。

1 章では、本論文での議論に必要なシベ語の概要について述べる。

2 章では、先行研究の記述を出発点に、本論文で取り扱う形式と注目すべき問題点を整理したのち、本論文での仮定を導入する。

3章はアスペクト接辞の差異を、モダリティ語尾 =i が後続する場合について論じ、上記の図2の体系を主張する。

4章では、2種類のモダリティ語尾 =i と =ŋe、およびモダリティ語尾が後続しない形式の計3つの形式について、三形式が共通して主節の述部に用いられる完了形（動詞語幹に完了アスペクト接辞が後続した形式）の場合を取り上げて論じ、上記の図3の体系を主張する。

5章では、非完了形、非現実形の場合にも完了形と同様の議論が可能であることを論じ、さらにモダリティ語尾が現れない名詞・形容詞述語文の特徴を動詞述語文の特徴と比較しつつ検討する。

6章、7章では、4章、5章の議論のために行った、本論文で扱う言語形式が発話参加者の知識状態の変化を表すという分析、および、モダリティ語尾=i と=ŋe がそれぞれ知識データベースへの命題の書き込みと知識データベースからの命題の読み出しを表すという状態変化を表すのに対し、モダリティ語尾が後続しない形式は知識データベースの状態変化がないことを表すという分析が妥当であることを、これらの言語形式に関わる具体的言語現象を取り上げて論じる。6章ではモダリティ語尾とイントネーションの共起関係を平叙文と疑問文に分けて論じ、言語形式が知識データベースの状態変化を表すか否かが共起するイントネーションの区別に関わっていることを示す。7章ではモダリティ接辞=i、=ŋe が後続する形式と、後続しない形式の持つ統語的機能（連体用法、名詞用法）の差に対して、4、5章の分析に基づきこれらの形式が表す発話参加者の知識データベースの状態変化が可能な統語的単位の差異として妥当な説明を与える。

8章では、3つの補助動詞 bi-、o-、yela- の表す発話参加者の知識状態の変化について論じる。

9章では、本論文の分析が先行研究の中でどのような位置を占めるかの検討を行った上で、今後に残された問題点を整理する。

10章で本論文の主張をまとめる。